

tab

No.
14
2009
/01
/15

後藤美和子 / 石川和広 / 野村龍
秋川久紫 / 長尾高弘 / 近藤弘文
高塚謙太郎 / 水島英己 / 山岸満
福島敦子 / 木村和史 / 倉田良成

糖 II *Machilus thunbergii*

響
TAKA

相
実

法
身
法

法
身
法
相

2003

AWADA



cont.

詩篇

- 後藤美和子：天の川／01
近藤弘文：が折れた腕や3／02
秋川久紫：追憶Ⅶ（残音と寸劇）／03
長尾高弘：小春／04
野村龍：虎／05
高塚謙太郎：フルーツを盗む少年／06
石川和広：まだ入れない場所／07
福島敦子：オブラート／10
水島英己：凍死／12
倉田良成：私の小倉百首から——こひしかるべき・人にはつげよ／14

文

- 木村和史：家づくり日誌 その三／18
山岸満：アートに出会う 三木富雄展、米田知子展／20

あとがき集／23

画：和田彰

tab 第14号／2009年1月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateisi11@k3.dion.ne.jp

後藤美和子

天の川

遅くまで祝いの鐘が鳴っている

何、何のために

日暮れの街に出向く勇氣

新しい帽子を求める気持ち

うず高く積まれた

海辺のペチカ

足を燃やして寝そべって

ここは私たちの消失点

ここから線は

交わらない二股となる

伸びる長脚となる

太い道路を隔てる対岸となる

絵画の中の空と星

輝く夜の雑踏に

繰り返し道を渡りながら

消失点を探す、消失点を探す

(皆既蝕四十五)

近藤弘文

が折れた腕や3

はがねの時間をひとはかなでる
そういうことだ

に躓く光としての

は胡桃の亡霊としての

を想え詩があなたを殺すことも

あるのだと鬱金色の太陽てふて

ふ

イルムを焚き

あるくたびに崩れてゆく動物の

どこかで自転車が一台消えましたか

だれかという廃墟

降らない雪をみるんだね

だれかという廃墟

追憶Ⅶ（残音と寸劇）

深夜の野方警察署の取調室。仕事場の茶房の床に聖水をかけた客を売った帰結として思いがけずパトカーで連行されてしまった青年。加藤和彦の「アラウンド・ザ・ワールド」のリズミカルな残音を愛でていくうちに、大柄な体軀の巡査が記していく調書の彼方に不意に立ち上がる辛子色の詩行。カウンター越しの口論の末、ボクサー志望のウェイターとの掴み合いの喧嘩を辛うじて回避したのはつい四時間程前のことだ。器物破損のみの単罪、猥褻物陳列との併罪に関する講釈に相槌を打ちながら、「Xへの献辞」に書かれた剃刀みたいな言葉の裏に刻印された性の痕跡に郷愁を覚えつつある青年。淡い月光の中をたゆたう天空に遊ぶ一頭の蒼龍の姿。眼の前の平和の使者風情の地方官吏は、果たしてあの茶房の長女が殉職警官の未亡人であることを知っているのだろうか。ペーター佐藤、吉田カツ、金子國義らが描く胡桃色のエロスの寸劇を糧として強靱な精神の輪郭を日常の裡に紛れ込ませる術を会得した青年。失態を自覚した酔客の男がいつしか留置所の乾いた闇の中で落ちるであろう大いなる悔恨の眠り。やがて青年はざら紙の調書にささやかな祈りを込めつつ署名する。瞬時に跡形もなく霧散していく辛子色の詩行たち。戯れに夜を歪めるだけのパトカーに乗せられて茶房に戻ると、シャッターの半分閉まった店先で手持ち無沙汰に待っている年老いた女主人の姿。長かった一日がようやく終わり、下宿部屋に帰った青年はモルタルの壁に貼られた赤いJUNの大判ポスターをゆっくりと引き剥がす。アイボリーに塗られた壁を広いキャンバスに見立て、油性マジックでうねるような蒼龍の動きを真似て、そこに詩人としての筆名を自由自在に書き連ねていく。

※ペーター佐藤：ミスドパッケージのパステル画などより、初期のエアブラシ作品が鮮烈だった。

※吉田カツ：人気を二分した軟派の「ぴあ」（及川正通）と硬派の「シテイロード」（吉田カツ）。

※金子國義：美術出版社刊の画集「アリスの画廊」と富士見ロマン文庫の表紙画には幻惑された。

小春

ここは最高だねえ。

洗濯はしてくれるし、

風呂には入れてくれるし、

座っていけば、

はいと食事を出してくれる。

そう言っているのは、

かつて家族全員の炊事洗濯を

していたであろう老婆である。

本当にそうだねえ、

と別の老婆が答える。

話しているのは、

その二人だけだ。

全部で男女二十人ほどいる。

みんな車いすに乗っていて、

はいと食事が出てくるのを、

黙って待っている。

暖かい日の光は、

この建物の中にも

入り込んでいたが、

何やらばつが悪そうに、

もじもじしていた。

野村龍

虎

左腕を庇いながら

水の中で祈る

虹の独り言が

水草の茂みから溢れ出して

水面に立ち昇っていく

翳り始めた寺院に

黄緑色の風が注ぎ込まれ

鶉達が一斉に羽ばたく

壊れたコンパスは

女神の掌の中でまどろみ始め

無数のオレンジが

傾いた月に降りそそぐ

城は

忘れられる毎に

少しずつ 砂の歌に沈んで行き

満開の曼珠沙華の中で

不意に

結婚が燃え始める

K氏、耽る。

1 フルーツを盗む少年

色への信憑を祓い慎む日一日がその果物の輪郭を刻むとしよう。そこへ伸びる感情のひらかれた手は陰影の道標となり疑わしいあなたを刻むのでいつしか胡乱なはためきの私語に達成する。放課後の時間帯、名の昏みの日々、彼の薄い瞳は囚らずも母音の暗がりや担保に謀り事の気鋭にすすがれあなたのようなわたしのような世代を質草に豊頬を賭け歩いているのではないかとあなたに一度ならず発想させなかつたか。その証拠にその唇よ突飛な夢想に邪な沈黙の平行を視線して黒々と蟠っているあの感情の到来を拒む仕打ちにむせび、しかしながらあなたに手を曳かれた遊園状の鈍楕円の影はものを食う私語に溢れ遠くあなたの後ろ姿を追うことだけを許容の狭間から覗き見ていたわたしの唇の色づきといかに異なっているか。ところが窓外に転ずればその樹木の見えないその下部でわたしが静かにしやがみこみ感情のひらかれた手ではなくもう一方の果物の臭気に満たされたそして粘く貼りついた愚鈍な彩色の行方を追っていたとしてわたしに何が望めただろう。あなたによる打擲はつまるところわたしの六腑を無造作に撓めるだけ思わず知らず立ち上がって彼の気づかない栗色の毛髪を掠めるだけなのでもう世代は尖端ではなく復讐をしか意味しないわたしはあなたは過去にすらひれ伏すことができないその救いのなさを眺める平らな雲の下の屋根上から投身する青い影は決して描写されるはずもなく。

まだ入れない場所

朝

自転車で駅前に出る

朝だけにしかない空気の感じ

ざわざわした通りの陽だまりの中に

ある

あともう少しで消えるかも

自転車の撤去が始まっている

ハンドルを握って商店のとおりをうねうね

みじかくブレーキまた

走り出す 止まる 短く 行く 止められるところは？

うかつに歩道脇に止めたりなんかできない

ああブックオフがあるあそこに自転車置けると思う

JRの貨物の搬入口が駅の裏通りにある

クロネコの制服をきたおじさんと女の人が荷物を積み込んでいる

女の腰の細さ、おしりの丸さをついみてしまう

その細さや丸さは世界を作動させる何らかの…なんて変なこと考えていると

駅ホームと外をつなぐ鉄門扉が開く お兄さんが出てくる

おどろく

あそこから乗客が出て行けたらいいのにな すぐ

駅から出られるのにといつも思う

けど、関係者の鍵がないとダメなのだ

光の帯と影の帯が互い違いに

自転車を進めるたびに闇からまぶしい方へ

まぶしい方から闇へ

裏通りは人がけつこう歩く だからうまく進めない

ブックオフの前に自転車を止めようとしたらシャッターがしまっていた
が角からエプロンにプラスチックの名札をつけたお姉さんがでてきた
シャッターに鍵をさすと自動でガラガラと開いていく

姉さんの店員に「何時から開くの？」と訊く「10時からです」

時計は9時52分

「じゃああとで来るから止めさしてな」

そういつていると

また店員が3人出てきてポールや旗や灰皿を置く

僕は出したてのポールの横に自転車を止め

ステーションビルに向かう

エスカレーターを昇っていくと

どの階も格子状のシャッターで入れないようになっていく

4階のレストラン街はシャッターがない

ラーメン屋も喫茶店ももう起きたての顔ではない

白い床の廊下をさつさとさつさと歩く

5階に着く

警備員がひとり エスカレーター前にいる

エスカレーターと店の間には踊り場みたいに小さな空間がある

その空間はガラス戸で仕切られている

向こう側にはまだ入れない場所が広がっている

「10時からやね」「しばらくお待ちください」

時計は9時57分

3分はしばらくなのだろうか 警備員に話しかけたい

でも彼はゆらゆらして向こうを向いている

59分彼は扉に手をかけ「いらっしやいませ」

そのままこの私は中に入ってしまった

見たことのないようなあるような朝の店が

少しだけあたらしい息をしている

福島敦子

オブラート

顆粒の漢方薬をオブラートに包んだ

破れやすいので

もう一枚包んで二重にした

これで安心

はい

おとうちゃん 飲みよ

父は両手をゆるく合わせて拝み

薬を受け取った

ぶるぶる

ぶるぶる

身体を震わせている

わたしは台所にもどり

後ろからそっと見ていた

なかなか

飲んでいない様子がない

ぶるぶる

ぶるぶる

父の背が震えている

なにしてるん？
とのぞき込むと

父は

二重にしたオブラートの上一枚を
脱皮さすようにしていねいにはがしていたのだ

はよ飲み！

穴が開いてしまったオブラート一枚に包まれた漢方薬
をこぼさずに

じょうずに

父は飲み込んだ

そんな難しいことはできるんや

元氣だった時の父はおもしろ味に欠ける人だったのに
今はこわさが冴える

ひとまず 今日は大丈夫だ

父は落ち着いている

わたしも

凍死

杜甫の「茅屋秋風の破る所と為る歌」は

大風に茅ぶきの屋根が吹き飛ばされて

雨が漏るのを嘆く詩だが、

その後半を黒川洋一の訳で引用してみる

「ふとかんがえる、どうかして千間も万間もある

広い広い家を手に入れて、おおいに天下じゅうの貧乏人を

おおってやりみんなでよろこばしげなかおを

見合わせるようにしたいものだ。しかもそれは風にも

雨にもびくともせず山のようにどっかりとした家である。

ああ、いつの日にか目の前によきとこんな家が

そびえたつものを見ることができたならば、わたしのすまいが

ひとりうちこわされて凍え死をしたとしても満足である。」

この詩を思い出したのは

昨年末から年頭にかけての日比谷公園「年越し派遣村」の存在だった、

そこで年越しをせざるをえない「派遣切り」などにあつた

人々の存在だった。静岡から徒歩で歩いてきた人もいたという。

杜甫は自分の貧しさだけを嘆くのではない、

自分の貧しさは天下じゅうの

寒士たちが山のように堅固な家を手に入れることができたなら

どうでもいい、いや

そのときには自分の庵が破れて、自分は凍死してもかまわないとまで言う、

これは祈りである。

とくに「一生愛う」人、杜甫の「共苦」の精神の発露であり、やがて

それを後の詩人たちはリレーしてゆく。

うすく発想の形式として残存するにすぎなくなったかもしれない、しかし、そんなことはどうでもいいことである。

そこに貧しき人がいて、

そこに悩む人がいて、

そこには必ず杜甫がいたのである。その遥けき歴史を思う、

今思う、

S 総務政務官は派遣村に参集した人々のことを次のように描写したという

「本当にまじめに働こうとしている人たちが集まっているのかという気もした」

『『学内を開放しろ』『学長出てこい』、そういう戦略のようなものが垣間見える気がした』

杜甫の伝統から見れば、これらの言葉たちとその発言者はモンスターのようなものだ、

自分一人が貧しくなければそれでいい、

そういう意味で、世界で一番貧しい人間の言葉である、

ああ いずれの時か 眼前に：

わが庵は独り破れて：

凍死を受くとも

また足れり

こひしかるべき

例ならずおはしまして位などさらむとおほしめしける比、

月のあかゝりけるを御覧じて

心にもあらで此世このよにながらへばこひしかるべきよはの月かな

三条院

あのとときもアパートの部屋の前の廊下に立っていた。昨日も、またその前の日も、というぐあいには、父は立ちつづけていた。中に入れるなど言っていたのはぼくだったのか、そうは言わなかったのかはよく判らないが、アパートのドアはかたくなに閉ざされた。母とぼくが父と別れてここに来てから二年ほど過ぎていた。それまで一家で住んでいた借家を出て、横浜の外れの町に父もアパートを借りたらしいことまでは知っていた。何をするともなく、映画館の内に一日中いたことなども。あのととき、窓の外に映っていた影がふいに沈み、大きな音がした。扉を開けたら、父が倒れていた。数日間、飲み食いをしていなかったようだが、酒飲みで恐ろしかった父がこんなにも簡単に毀れてしまうものだとは、思ってもみなかった。母は家政婦の仕事で外に働きに出っていたので、学校をやめ家にこもって詩などを書いていたぼくが、そのときから父に対して絶対的権力をふるうことになった。まず酒たばこはいつさい禁止。二十歳になるやならずのぼくは就寝前にウイスキーなど舐め、たばこを吸う習慣があったし、母も弱いながら寝る前に焼酎を生なまで飲んでいたりしていたけれど。それから、火は、ひとりではけっして使ってはならない。隠

れたばこをするな。ぼくの手の空いていないとき、飼っている猫のチーチャンの飯をつくれ。もうめざしは焼いてあるから、こうやって細かくほぐし飯に混ぜてやれ。用事から帰ってきて猫の飯を見ると、白飯の上にめざしが一本そのままのっかっているだけである。ぼくはかっとなって、こうこうとちゃんと言ったはずじゃないか、なぜやらない、やれないなら、じゃあ、以後こういうことは決していたしませんと誓約書を書け、と、詩を書くレポート用紙の一枚を破って、サインペンと印鑑といっしょに父の前に突き出した。口舌はもうまく廻らなくなっていた父は、何も言わず少し目を剥いてぼくの顔を見、それからふっと横を向いた。そこに微かな嘲笑の影を見たような気がしたぼくに怒気が上がり、平手で父の頬を打ちすえた。そのときになにを感じたのか、一方的になるのが厭だったのか、ぼくは自分の頬を指し、ここを打つと言った。父は容赦なく打ってくる。ぼくも思いきり打ち返した。際限もなく繰り返すうち、双方苦痛が耐えがたいものになってゆく。ぼくはこのあたりでお互いを許し合い、涙を流しというようなことを想像していたのだが、実際少量の血の泡が混じる父の顔に見たのは、恐怖と嫌悪以外のものではなかった。それから数日のあいだ、家に包丁や剃刀、金槌が置いてあるのが気になって仕方なかった。それで父から襲われたらどうしようか、寝ている間なら防ぎようもない、隠そうか、というところまで思いつめたとき、そんな自分をふと顧みて、初めて深い懼れと悲しみの心が降りてきた。父はその後、譫妄的な症状があらわれてはるか武蔵の果ての草深い病院に移って死んだ。父は父自身のことをどんなふうに思っていたのだろうか。いまでも父は夢に出る姿で唇に血を滲ませている。かぎりなく美しく、さびしい月明の下、ぼくだけに庇護されて。幽かに音を立てる、虻となり、早蕨さわらびとなつて。

人にはつげよ

隠岐の国に流されける時に、舟に乗りて出で立つとて、

京なる人のもとにつかはしける

わたのはら八十嶋かけて漕出ぬと人にはつげよあまのつりぶね

小野篁

病を得て籠もっていた地方の町から、風に流れ出た柳の絮みたいなふと再びこの横浜の町に戻ってきた。地方の町に流れていった一人のときとはちがって、戻ってきた春は母と二人だった。新横浜で新幹線から降り、その足でかつて暮らしていたなじみの私鉄駅前の不動産屋に当たって、二軒目でアパートの部屋を決めて鍵をもらった。そうしないと今夜寝るところがなかったから。六畳と三畳と小さな台所のついた部屋に、翌日からだんだん色んなものを買そろえていった。布団、食器、家具、家電製品、それから電話を引き、さいごにねこを拾ってきて飼った。さいしょのうちはさみだれ式で、貯えを食い潰さざるを得なかった仕事の依頼も、少しずつ少しずつ増えてゆき、ときおりは商店街の鮭屋に母と鮭を食べに出かけるようになっていった。種子が産毛のような細い根を生やしてゆくように、この寺のある小さな町に私たちはわずかになじんでいったが、水鳥の騒ぐ公園の池や大銀杏のあるロータリー、神社の裏手の崖際に危うく立っている飲み屋の灯りなど、そこに疼痛のような平安と慰藉を感じなかったといったら嘘になる。平屋の日本家屋から聞こえてくるアップライトピアノの音、ぜったいに洗濯物を外に干さない横文字の表札ばかりならんでいるアパート、サンダルばきの散歩で丘を越え、新横浜駅のバーでひっかけたドライシエリー、それらは暗く抜けんばかりの濃密な晴天の時間とともにあった。ある日は母と浅草へ出かけ、宝飾店など見てまわるうち

に、しげしげと母が眺めていた鼈甲の髪留めを、これなら買えそうだと踏んで思いきって買ってやってひどく母を喜ばせた。いままでさんざ苦勞してきたのだ。これくらいはしてやってもいいだろう。その浅草では分厚い木の表札を求めて、木造賃貸アパートの貧相な戸口におおぎように掲げた。鼈甲以外にも、どうやら母の所有する宝飾品はだんだん増えていったようだったが。べつのある日、私が一人で家にいるときに電話がかかってきて、民生委員とかいう老女が、うちの家族構成やら職業やらにつき、いきなりぞんざいな口調で訊問してきたので、そのままの口調をお返ししてやった。あとから母が色をなして怒る。民生委員のなんとかさんは私がひどく無礼だったとお怒りである。どこの何とも知れないものの世話をしようとひとが親切に訊いてやっているのに、あんたんとこのせがれの態度は何だ、と言われてわたしは立つ瀬がなかった。だいたいわたしは町の老人会にさえ入れやしない。それというのもわたしたちがこなぼろアパートに住んでいるからだ。それだからひとから馬鹿にされるのだ。おねがいだから、収入はあるのだから、もつとちゃんとしたところに引っ越そうよ。もとより土地に深いえにしがあつて住んでいたわけではない。心のほんの少しの痛みのあとで、私もいともたやすく隣のマンションへ移住を決めた。引っ越しの日には晴れていて、ねこはもらつてくれる人がいた。拾われてから九年たち、大ねこになった四肢を抱いてその人に渡すとき、はじめてえぐられるみたいな悲しみを胸に感じた。悲しみは乾いた風のなかでたちまちにうすれ、私たちはまた春の大空へ、うつろな絮のようにただよい出てゆく。笛一管も持たず。

家づくり日記 その三

連日の強風に、テントが耐えられるだろうか。支柱が折れるか、張り綱が切れるか、ペグが抜けるか、あるいはテントそのものがいきなり倒されるのではないかと不安になる。それで急遽、風よけの囲いを作ることにした。物置をつくるために買い込んだ三寸角の柱と野路板を、そんなことのために使いたくないのだけれども、流用することにする。

テントの張り綱とペグを避けて地面に60センチほどの深さの穴を掘り、柱を埋め込んで周囲を突き固める。水準器で柱の垂直をほぼ確認して、胸の高さほどに野路板をぐるっと張って行く。あくまでも仮設のつもりなので、下見板のように重ねたりはしない。合わせ目は隙間だらけになってしまいが、かなりの程度、風は弱まってくれるだろうと期待する。野路板はあとで剥がして再利用できるように、なるべく長いまま使うようにして、釘も端の方にだけ打つようにする。

この作業のあいだじゅう、わたしの気持はなんとなく後ろ向きになっている。せつせと手足を動かして、汗を噴き出させているのに、スタートラインはまだはるか先にあるようだ。動いてくれるはずの体が、予想以上に動かない。すぐに息が切れる。こんなんで大丈夫かいな、と思わず自分を笑ってしまいそうなほど、呼吸が荒い。夜中の肩こりや、指の痛みなどでよく眠れないまま現場に立っているのがよくないのかも知れない。あるいはもっと他の、精神的肉体的な理由があるのか。思い描いていたことと現実とのギャップが、そうと自覚されないままわたしの気持を軋らせ、ブレーキをかけているのかも知れない。

わたしがそんなことをしているあいだに、水道、温泉を引き込む仮設工事が、機械を使っ

水道の蛇口は北東の角に、温泉の蛇口は南西の角に仮施設してもらう。敷地の正反対の角と角という不便な位置になってしまったのは、水道の本管と温泉の管がそこまでしか来ていないためで、本意だが仕方がない。水道の蛇口と温泉の蛇口を一緒に並べようとすると、敷地内の配管工事が必要になって数万ほど余計に費用がかかる。そのような手ではないし、可能な限りなにかも自分の手でやりたいと考えているので、業者による工事は最小限にとどめてもらうことにする。

仮設の水道工事とはいえ、最終の図面を提示できたら後で無駄なやり直しをしないで済むのだが、なにごともし盛り土の上に立つてから考えると決めてきたので、図面はできていない。どこに母屋をつくるか決めていないので、水回りがどの位置にくるのかも分からない。「家の位置はどのへんになりますか」と水道屋さんに訊かれて、「どこにしましょうかね」と答えたら、「わたしはどこでもかまいません」と呆れられ、笑われてしまった。

電気工事も水道工事も、法的には個人で勝手にできない仕組みになっている。自己責任でやらせてもらえれば、わたしのようなセルフビルダーは万々歳なのだが、親切のつもりなのか不親切の最たるものなのか、自己責任をとらせてくれない仕組みが綱の目のように張り巡らされているのを感じず。悔しいが、法には従わねばならない、かというところでもなさそうだ。「自分でやっちゃえばいいんだよ。難しくないよ」と親切にそのかしてくる近所の人は何人もいる。たいていのことは自分でやってしまうし、自分でできる。そういう人が多いように思える。しかもいくつかの法に関しては、この地ではなぜか慎重深く忖んでいるように見えなくもない。法と法

の埒外のせめぎ合いは、互角の勝負がおもしろい。

そんなわけで、できあがったわたしの最初の建築物、風よけの板囲いは、円形でも四角形でもなくきれいな六角形などでもない。仮りの風よけだよ、と言いつつ、わたしは、持そのままに、見事にいびつなものとなった。

工事のあいまに水道屋さんが覗きに来て、「これじゃあ冬を越せないな」とぼそつと断言する。水道屋さんはじつは建築にも詳しいと後で分かった。父親が大工をしていた関係で、のみやカンナを研ぐことができるし、小さな家をひとりで造ったこともあるのだそうだ。「あいだに柱を足せば大丈夫かも知れない」と忠告してくれる。

わたしとしては、囲いに冬を越させるつもりはないし、野路板の中間に柱を立てて釘を打ちたくもない。作業小屋と物置ができるまでの三ヶ月ほどを生き延びてくれればよいと思つて始めた作業なので、迷つたけれども、素直に忠告を聞き入れて柱を追加することにした。

囲いを作りながら、材木をのせて作業台にする馬も、ひと組作つた。材木屋さんで見かけたものをそっくり真似て作ろうとしたのだが、単純だったはずのその構造をどうしても思い出せない。馬用の端材も材木屋さんが選んでくれたし、親切に作り方まで教えてくれたのに、思い出すことができない。頭の中に図面を描けないわたしの欠陥は、こんなときが一番はつきりする。もうひと押しすれば思い描けそうなのに、そのひと押しが駄目なのだ。紙に図面を描いておけばよかった。仕方がない、我流で作ることにする。時間に追われたり、頭の事情や諸々の事情によって我流に走つてしまうことはこの後、頻繁に起こる。

そうしたいと思つてする我流ではなくて、仕方なくする我流に近いのだが、そのことが致命的な手抜きになつてはまずいので、必死に知恵を絞る。もちろん他人のアドバイスにも耳を傾ける。耳を傾げるけれども、実際に体を動かし始めると、いつのまにか我流に流さ

れている。我流だらけの必死さが、わたしだけでなくセルフビルダーの姿そのものかも知れない。

馬は高さの違う三組ほどがあるとなにかと便利なのだが、結局、そのひと組で間に合わせることになった。あれもこれもと用意した道具のなかで、主力となつて活躍してくれるものと、なくても差し支えないものがしなに見えてくる。あれもこれも使うことはしないで、最低限の道具でしのいでいくようになる。馬はしかし、あとひと組は欲しいところだ。次期の課題とする。

電気は早々に引いてもらつたし、盛り土の上にはぼつんと顔を覗かせている蛇口をひねれば、水道も温泉も出る。少年の心にとつて、これ以上の贅沢はない。

アートに出会う

*十月七日

「三十年目の三木富雄」展、「米田知子—終わりは始まり」展

まず三木から。確か七〇年前後に彼の作品に接した記憶がある。この作品展も三十年目とあるように、逝去から三十年目のものとなつた。三木は私たちにとつてまず造型作家である。そしてなによりも「耳」をつくりつけてきたという一点で私たちの記憶に強くきざみこまれた。三十数年前に接した印象は今回あらためて作品をまえにしてみてもそれほど変更されなかつた。「耳」だけをとりだし、それを繰り返し返し執拗に大きさをかえ、あるいはデフォルメし、提出された作品群は一見アナトミカルなオブジェという印象を伴つたとおもう。しかし、アルミニウムというマテリアルからかむしろその肉体性は無かつた。私の当時の印象はオブジェというにはあまりにも生々しく、いっぽうで肉体の一部である器官をひきぬいてきたような生々しさはない。そこにあるのは対象の持つ具体性というものより、「耳」という器官に固執する三木の視線であつたと思う。当時の記憶になかつたもので小さな「耳」を幾つも並べた作品がある。当時これらをもつと印象に焼き付けていたら三木の目指すものはつきりとわかつたとおもう。これらの「耳」ひとつひとつは少しずつの違いがあるが、一見全体を見たとき羅列された「耳」は、「耳」を逸脱された様が誰の目にも明らかにみえる。限りなく増殖してゆくように視える「耳」。それはもうすでに「耳」の属性を超え作者のオブセッションがそのまま鑄型をとおしてしぼりだされたかのように私たちのまえになげだされてある。

今回の展示には文章、カラージュ、アセンブリッジ、ドローイングなどもあり、私たちのしらなかつた三木の側面がうかがうことができる。とりわけ文章から彼がこだわっていたことがどのようなものがうかがうことができる。アーチストの書かれた文章がその文意をたどることに困難さをおぼえることはよくある。三木の文章もそれにもれず、展示場で読むにはかなりシンドイものであつた。脈絡というより使われている語、つまり概念が画家の意識あるいは無意識のバイアスが強くかけられているためか、変形あるいは全く別のもんとして使われているのである。彼らアーチストの書かれたものが往々にしてこのようになるということは、かれらが自らの表現として最終的に言葉による表現に行き着かなかつたことによる。このことはとても宿命的なことだとおもう。言葉にたどりつくか、あるいはそうではないもの、たとえば視覚と触覚による世界、そして音という触覚が外延化され高度に構築された世界、これらに自らの表現としてたどり着くかはおののの人生での不可避性にかかつていることと思う。三木は言葉にはたどり着かなかつた。しかし、言葉は人間の大きな宿命である。いや、宿命というよりヒトがヒトとして存在する大きな基底をなしているものだ。そのことからヒトはたとえ言葉にならない—あらわしようが無いことでも言葉にあらわそうと執拗にこころみる。三木もその例外ではない。

彼の文章を深読みしてはいけない。私たち

に要求されていることは精確によむことである。じつは美術つまりアートの世界と言葉の世界、つまり批評の領域との間には断層があるのだ。この断層にどれだけの深度と較差があるのかはおそらく誰も測定しえていないのである。

近代文芸批評が小林秀雄によって開かれたこと、そして美術批評が彼によってなされたということはそれ以後の批評の可能性を大きくかぎるものであった。つまり作品に接する側からのアプローチとして常に言葉による語りかけがあるが、作品に見合った批評の構築はいまだなされていないことだ。小林の批評の言葉とは常に言葉に還元されるべきものとして作品を腑分けする。ここで言うところの言葉とは小林の批評眼になうものとして、彼の自意識に釣り合うものとしてそていされているのである。つまりわたしたちがてにするアート批評の言葉とは、言葉によって作られたものにたいして何事かを語るように練り上げられたものであることはまちがいない。美術批評の言葉はこのことから常にある種の照り返しをうけつつづけている。すなわち言葉によって組み立てられていないものを言葉で語ろうとすること。そのとき批評の軸は、言葉ではない、言葉に還元されることを拒否する領域と、言葉で語りつくそうとする言葉の持つ本来の欲望との間にひきさかれるはずだ。作品は作者の飽くことなき視線と指先によつて刻々と実現されてゆく。そのプロセスなしには作品の実現はないのである。そのとき言葉はどうやって作品に到達できるのか。ひとつには視線である。わたしたちはまづ視ることから、作品を視ることからはじめる。そのときの視線の運動、ある種のオートマチックな運動に導かれてゆかざるをえない。おそらくその先には意味、つまり言葉に集約される意味性がある。言葉への回帰性である。たぶんこのことは不可避なことなのだ。しかしここで批評の言葉はこの回帰性のまえで踏みとどまらなくてはならないのである。意味へと回帰しようとする力にたいし歪力とでも

呼べる文体がここで要請される。つまり視線の運動にあくまでも寄り添う言葉である。ここがまず美術批評の賭場口なのだ。

三木のノートから読み取れることは、そのまま彼の作品にむすびつけることではなくどのような意識のもとに制作していたかの彼の姿である。つまり、実現された作品とはとりあえず無縁のものとしてあるということ、である。たとえば彼の言葉は「耳」を語っているか？ 否である。語ってはいない。たぶん彼は「耳」の制作過程で語るべきことを語っているのである。言葉と制作することとは本来的に異なる領域にあることは明らかであるからだ。むしろ言葉の領域と制作（ここでは描く、あるいは造型する、身体表現するといったことを指し示す）とは連関があるが、この両者には重ならないぶぶんがあることはいうまでもない。したがって三木の言葉は彼の直面していたこと―ワダカマリを如実に表している。たとえば、会場に展示されていた遺稿に「間」ということについての一文があった。そこから読み取れたこと。「間」とは何かと何かのあいだを指す言葉ではない。彼によると「間」とは時間や空間のあいだを指すことではない。わたしたち、つまりヒトが意識を持ったこと全体を指すものとしてさしだす。そこにコトバをさしはさむこと……。なにぶん展示されている文章を読んだあとでこれを記しているためその文意がかすれつつあるのが本来のものとずれている気がする。しかし三木の舌足らずな文から読み取れることはこういうことだ。今、此処にいる私あるいは彼（三木）がどこにも着地点をみつけることができないう感覚だけが確固としてある。その不定感がかれの現在を大きく占めているのだ。この空無感の照り返しとして「耳」はあったのだろうか。彼、三木の記した言葉より「耳」はたぶん多くを語っているに違いない。

次は米田知子だ。

写真家、米田ははじめてしるところである。今回の展示から彼女の作品系列はおおまかに

二つに分けられるとおもった。壁紙などを撮った恰もドローイングのような作品と具体的な風景写真。特に後者の風景写真が主軸をなしていることは誰の眼にもわかるとおもう。キャプションがなければ何の変哲もない風景。たとえばそのキャプションは次のように書かれている。「ノルマンディー上陸作戦の海岸」として現在の海水浴場となって人々が寛いでいる夏の海岸、色とりどりの水着がうつろのどかななんの変哲もない風景がそこにある。しかしここが歴史上大きな出来事の舞台であり多くの人々の血が流された特別な場所であることはこのキャプションがなければわからない。このことから米田にとって、コトバは作品の成立に欠かせないものである。ほかの作品ではアイルランドのベルファスト、満州事変の地瀋陽、ゾルゲ事件の背景の奈良公園、トロツキーの眼鏡など。これらを現在の映像で提出している。ここから思いつくことはいくつかあるが、そのひとつとしてこれらのありふれた風景の背後には別の顔があるということがまず最初に浮かぶであろうが、彼女の提出したまなざしはそのこととは全く逆といってよい。わたしのみるところキャプションと写真のセットからうかがえる米田の視線とは「特権化の拒否」あるいは「特権化の解体」である。これらの風景によって示された地点は現在ではむろん平凡な日常が営まれているものでしかない。その当時もある瞬間を切り取ればそうであろう。つまり、わたしたちの目になじむ極くありふれた光景ではない。それがある時点で……つまりその点を特異点とよぶ……ただならぬ場になってしまった。米田はおそらく特異点となつてしまった光景を解体しようとする。つまり後戻りのかなわぬかつての凡庸な風景を呼び寄せようとしているのだ。たぶんわたしたちは悲しいことに事件のアトカタにたちつくすしかないのだ。つまりあらかじめ生起する出来事を予期することなどできない。ただアトカタに繰り返し立ち尽くすし、その地点をほんとう

は何事もないわたしたちの凡庸な場に戻すことを「無意識」におこなっている存在なのだ。米田のもうひとつの系列の壁紙を撮った作品は、ここで述べた無名性に帰したいという過剰な視線が放たれたものといえるだろう。そのような視線の欲望に写真という方法のもつ特性はかなつていとおもう。

#三木富雄展…児嶋画廊、米田知子展…原美術館

confidence

映画を見る際、監督で選ぶ人と俳優で選ぶ人がいるそうだが、私は後者だ。そしていつも裏切られる。なぜなら俳優とは、いい俳優であればなおさら、作品ごとに役を演じ分けるものだから。私が恋した人物は、他のストーリーでは同音異義のように別の心を持ち、多くは顔まで違って見える。私は恋人を見失い、新たな恋を探さなくてはならない。(後藤)

文章で苦勞する。ひと夏を、大工仕事に没頭し過ぎたせいだろうか。それとも、一段落してだらっとし過ぎていく日々のせいだろうか。体脂肪率が増え始め、骨格筋率が減り始めている。まずい。(木村)

定年後の一年があつという間に過ぎてゆく。あれこれと計画はあつたが、どれも実行できなかった。そんなもんだろう。今年は、少しは暇になるから、「文学」に集中しようと思っている。(水島)

2008年の収穫について。まずは、「恋をしなくとも詩は書ける」ことがわかったこと。これについては、説明は要らないでしょう。また、「シニールレアリスムの手法を自作に応用して抒情詩を書く」ことが、私のライフワークではないか、と思えてきたこと。すこし説明しましょう。「恋を生まれた抒情詩」を卒業し、新しい世界を模索し始めたのですが、私の詩はイマージュの連続であり、実際に詩を書く際、私は、シニールレアリスト達が愛した「エクリチュール・オートマティック」、すなわち、かの悪名高い「自動記述」とほぼ同一の書法を用いていることに、今更ながら気

が付いたということ。すこしだけ、理性によつて味付けをした無意識。それから、これは収穫ではないのですが、29日に、同衾している猫と大喧嘩をしてしまい、それ以来、猫がまったく鳴かなくなったこと。どなたか、猫と和解する方法をご存知でしたら教えてください。(野村)

僕が卒業した中学校の校歌のフレーズに「はげましはげみ肩組めば」というのがある。続きは「今湧き上がる歌声の」だ。なぜか覚えてる。別に肩はくまんでもええと思うし、なんか「はげましはげみ」合わなくても各自好きなことをやればいとも思う。だって嫌いなやつと肩なんか普通組めんじやないか。最近試験勉強やつている。試験なのだから誰かが落ちて誰かが受かる。だからすれっからしで、さみしい狷介な気分なのだ。試験が自分を高める機会であるのも真実だが、落ちるか受かるかのどつちかに入るのも事実。さて世は殺伐のニュース多く、そこにも「格差」だとか「勝ち組・負け組」というのがちよつと前流行だった。だったというのは、勝ち組といふべき大企業が赤字経営になって落ちていくと同時に、そのあおりで貧乏な人は安い労賃すらもらえず街にあふれていつてからだ。そういうときにまあ、もう妬みあいだけではいえそんなにくまなく助け合いばかり出来ないだろうとも思う。「はげましはげみ」といつたって、食うものがなければ、少しでも楽しいことがなければと思う。イエスマミたいに「パンは欲しくない？」と聞かれて「いや止めとくよ」とはなかなかいえない。だって、めしは食いたいもん。社

会福祉の勉強しているせいか、やはり「衣食足りて」という部分を考えてしまう。今年の正月は気分的には下旬に控えた国家試験のためあまりのんびりできないだろうなあ。でも、せめていがみ合いを減らし人の悪い面ばかり拡大してみないようにしたい。そういささか人間不信気味の僕でも思う。いやそうしないとすぐカリカリする性格だからだけど。(石川)

十一月二十一日にレーシックの手術をしてから丁度一ヶ月が過ぎました。視力が回復したお陰で遠くのは本当に良く見えるようになりましたが、これまで近視のせいで相殺されていた老眼の症状が術後に一挙に顕在化して、本や新聞を読む際には老眼鏡がないと少し不自由な状態になって来ています。それから、子供たちを始めとして多くの方から「眼鏡をかけている方がいい」「視線の鋭さが目立つようになり、怖い感じになった」などと言われてしまい、村上春樹ではありませんが「やれやれ、参ったな」という感じがしています。それで、外出する時には以前に持っていた眼鏡のレンズをUVカットのものに入れ代えたものや、通販で買った安価な伊達眼鏡をかけて、以前の印象をなるべく変えないように心掛けています。視力回復後は眼鏡のないスッキリした生活になるはずだったのが、結局は不本意ながらも老眼鏡と伊達眼鏡を手放せない生活が始まりました。(秋川)

昨年は人間関係にもっともうんざりさせられた年だったように思う。今年だっとうだかわからない。が、とりあえずは謹賀新年。今年もよろしく願います。(近藤)

修練の試みとしてそれまでとは異なる態度にて詩作してみる、という連作を持ちたいと

思います。ただ、それはあくまでこちらの都合の話で、テクストとしての変移はほぼないものや映るでしょうし、現にそれは現象していかないようです。わからない話ですが、おそらくこの連作は将来的に新たに示される機会は与えられないでしょう。この場ですぐに死んでしまうものです。今のところこの作業はほとんど楽しくないです。愉楽は連作を重ねていくうちに生まれたら、と他力限りです。うまくいかなくても致し方ないことでしょう。僕自身としては派手に失敗したい、それを心がけるべきなのかもしれません。今回はあまりに変拍子がなさすぎますね。一度形成したテクストを解体したい衝動を抑えての今回の出品となりました。はたしてそれは試みの名に値するののか。

まだ試みられていない、と言うべきです。

(高塚)

父が認知症になってから危ういけれど意外と楽しい毎日になりました。純真な心でわたしを慕ってくれるからです。また子供を育てているような感じ。しかし、今度の子供はいろんなことができなくなっています。父も頼りない娘の世話になる、なれるなんて想像もしなかったことでしょう。親戚や友人に娘に看てもらえていいなーと羨ましがられて、恥ずかしそうにしています。

今号から参加させていただくことになりました。よろしく願います。(福島)

美術に関しては、全くの素人であるが、若い頃からとても惹かれていた世界だ。とぎれがちにも実物を観る機会を持って来たが、わたしなりにコトバでどのように近づけるんだろうか、という興味だけは持ち続けていた。今回倉田氏の勧めで「art」にのせていただきましたが、元の文章は、あくまでプライベートな「私信」ということ

で極く近しいヒトたちに書き送り始めたもの
です。このことは極く私的にこれからも
続けようとおもっております。(山岸)

何かが符合するという体験に不思議を感
じることは時々あるものだが、このたびの
個展に来てくれた人々の何人もが、まるで
申し合わせたように同じことを言うのにそ
れを味わった。

曰く、音楽は上手すぎないのがいいね：

法身是実相 は、高橋悠治作曲『音楽の
おしえ』より第2曲 五大皆有響のうち。

あるがままこそ教えの身 (和田)

何だか最近美酒佳肴というものに執着し
なくなっている自分に気づいている。体の
ちよっとした事情もあるが、そんな世界観
が近しく感じられるということだ。疏食粗
食にあこがれる。酒は菊正・畑である。お
前いまさら何だと言われそうだが。(倉田)